

以前に同様のご依頼をいただいた際には、(1) 博士論文の計画設定にあたっては、自分の関心のあるテーマにこだわることなく、研究史にブランクのある領域などを含めて、柔軟かつ实际的に考える、(2) 受験の段階ですでに査読論文の掲載実績要件をクリアしているか、かなりの程度でその目途のついている状態が望ましい、の 2 点を申し上げた。

今もその考えに変わりはないが、さらに在学中の個人的な経験に即していえば、博士論文の基幹部分は、中核となる論文と、それを補完・補強する何本かの論文で早めに固めておくということである。

中核となる論文は、修士論文を昇華させる場合もあれば、博士課程で新しく構想する場合もあるなど一様ではないと思われるが、いずれにしてもその 1 本のみでは博士論文全体を貫くトーンを決めるには弱いことにやがて気づく。博士論文はバリエーションがありながらも、一つの筋の通った集合体としての性格が求められる以上、やはりその基幹となる部分にそれ相応の厚みがなければ、説得力に欠けてしまう。いざ集合体としてまとめる段階になってからその厚みを生み出そうとすると違和感を生じかねず、調整に大きな時間と労力を費やすことになる。よって最初から全体の強弱をどうつけるかを考えながら取り組む。このことは個々の論文作成に入る以前から意識したほうがよいように思われる。

また論文の投稿に関しては、僭越ながら、強い心で積極的に挑戦することをお勧めしたい。誰しも査読のハードルの高さを考えて躊躇するものの、放送大学には紀要などの学内発表の機会がない以上、正攻法で挑むほかに選択肢はない。そもそも一步を踏み出さなければ何一つ得られないのは、社会万般の道理というものである。いま盛んにいわれるところのド文とて例外ではない。

もう一つ、指導教員の先生のご教示は謹んで傾聴したほうがよい。私は修士課程も放送大学で学んだが、長い人生経験に由来する自負もあってか、皆が皆、そのような方ばかりとは限らなかった。もちろん論文はあくまで自分の責任において書くものとはいえ、歴戦の専門家ならではの経験と知見に裏づけられた助言については、ありがたく承ったほうが自分のためになるというのが結論であったし、この認識は博士課程でさらに深まった。

以上は個人的な意見であり、放送大学博士課程の学生には大学の教壇に立たれている方なども少なくないため、無用の贅言であろうが、もし私のように研究者としての通常のプロセスを踏むことなく出願をこころざす方のご参考になれば幸いである。